



女子だつて

催眠アプリ

使つても良いよね

執筆：ももえもじ
表紙：柄島ヨツト(+AI補正)

人物紹介

■ 浅川 茉莉（あさかわ まつり）

親の方針により、工業系の学校に通う女の子。

社交性が高く、元気が取り柄であるも、男ばかりの空間に照れながら生活を送っていた。

ある日に、「催眠アプリ」を手に入れてしまう。

アプリは、あらゆる存在を意のままとする凶悪な性能を秘めていた。

茉莉は、気立が良い上に端正な顔立ちを備えている。

加えて成績優秀、運動神経抜群という完璧女子である。

それでいて男に囲まれているのだから、異性関係に不自由していない。

寧ろ、アイドルと呼ぶのも恐れ多い程に神格化された、それこそ姫のように崇められた存在だった。

そんな、何一つ欠点の無い茉莉。

使わなくても良い筈でも、在るとついつい気になってしまう催眠アプリに、今日も悩んでいた。

■瀬戸 徹(せととおる)

幼馴染の男子。筋肉質で長身。サッカー部。通称..せとつち

髪を染めてはピアスも開けた派手好きのヤンキー

茉莉曰く「春休みデビュー」

茉莉に片思いをしている。チャラ男風だけど童貞。

■赤坂 葵(あかさか あおい)

茉莉のクラスメイト。隣の席。身長160cm、体重45kgの小柄。バスケット部。

大人しい性格であり、ヤンキーばかりの学校では、極力存在感を消すことに務めている。

趣味が共通しており、下ネタが苦手といった点から、茉莉も気を許していたのだが……

プロローグ 前半

見慣れた天井に安堵すると、私は脳の覚醒を急いでスマホを手探った。

「スマホ、スマホッ、何処……あ、あつたッ!!」

指先に硬い感触が走ると、逸る気持ちを抑えられずに、そのまま布団の中へと引き摺り込む。現実感を咀嚼しながら、埃立つ暗闇で中身を確認した。

寝起きの第一にスマホとは、女学生として俗にも程がある。

……私が年頃の娘なのは確かだけど、これについては切に反論したい。

私は、とにかく確認したかったのだ。

「私のスマホに……催眠アプリが……??」

熟睡タイプの私は、普段から大して夢を見ない。見たとしても、内容を正確に覚えていられた日なんて、いままで数える程も無い。

そんな私が、今日は長々と夢を見た。不思議な夢を見た。

それも、明晰に。相手とのやり取り、その内容を一言一句と覚えていた。

夢の中で私は、見覚えの無い女性（？）から、謎のアプリを授かったのだ。

女……だと思う。マスクで顔はイマイチよく分からなかったけど、アルト調の透き通った声が印象的だった。

『アナタは選ばれたのよ。ということ……好きなように愉しんでみてね』

「え、なんの話……??」

『アナタのスマホに催眠アプリを導入したから。これさえあれば、どんな相手も好きなように操れるわ。いつでも、何処でも。愉しみなさい。せいぜいね』

「えええ……なに、その同人みたいなヤツ。なんで私にくれるの？」

『別に誰でも良かったの。ただ、偶然アナタが選ばれただけ。運が良かったって思ってくれば良いから。気に入らなかつたり飽きたりしたら、誰か他のヒトに渡してあげて。アプリ見れば大体分かるようになってるから』

「あー、うん。分かった」

あまりに突拍子の無い話だった。

しかし、夢とは不思議なものであり、どんなにふざけた展開でも、すんなりと受け入れてしまう自分が居る。まるで当たり前のように、こうして私は初対面の怪しい女から、催眠アプリなるものを受け取っていた。

飽くまで夢の話である。目が醒めれば、いつも通りの現実が始まるべきだろう。

だけど、明晰夢から目覚めた私には、なにか確信めいた予感が離れなかった。ロック画面を解除してスマホのホーム画面へと移動……すると、そこには見覚えのないアプリのアイコンが存在していた。

『催眠アプリ』

「マジで……??」

この時点で有り得ない話である。例え、このアプリが偽物だとしても……私は、こんな名前のアプリをインストールした覚えは無い。誰かの悪戯や悪いウイルスの所為だとしても、それでは夢との整合性に欠ける。

この時点で私は既に、得体の知れない世界へと足を踏み入れているのだ。次第に胸がうるさくなってくる。身体は、汗が出る程に熱かった。早速と起動する。待ち時間も無く一瞬で画面が立ち上がる。

受信範囲の設定【最低】

インテリジェント……使役可用【三件】

マイリスト【0件】

現在の接続【0件】

「……………」

開いてみると、安っぽいインターフェース上に、私と、妹と、母親と思われる存在が表示されていた。

何処から得た情報なのか分からないけど、私たちの名前がタブになっている。受信範囲を最低にしているから、ブルートウースの電波を拾うように、スマホの身近に居る存在が表れたのだろう。

……恐る恐る【受信範囲】の設定をタップしてみる。

範囲を【最低】から【中距離】に拡大すると、続々と新たなタブが出現した。

「これ……家の外に居るヒトたちかな。この苗字って確かお隣さんだよね」直感的に、外の存在まで読み込んだのだと理解する。

試しに、自身のタブを選択する。

夢の中で説明を受けた訳じゃない。全て直感的に操作していた。

「うわ、なにこれ……」

【性能】 【印象】 【操作】 【属性】 【外面】 【可用】 【presenting】

【potential】 【minority】 …

読み込みに少し時間を要した後に、私という存在に対して何十、何百個というステータス項目がズラッと現れる。

説明書は無い。一々疑問を抱いても時間の無駄だ。

とりあえず、一番上にあつた【性能】をタップすると、いよいよ私は恐怖した。本当に、どうやって収集した情報なのか……私の身長や体重、果てには知能や身体能力までも数値で表示されていたのだ。

知能や身体能力は分からないが、体重や身長は確かにアプリの通りである。

続いて妹や母親の情報も取得する。やはり、同じく正確な値が表われた。

明らかに、人知を越えた所業である。とうとう、それを実感する。

「こんなことが……マジのマジで神のようなアプリじゃん」

しかし、なんというか……

まるで素人が作ったのような、ダサくて懐疑的なインターフェース……

何百という項目があるものの、言語が統一されておらず、途中からは日本語が無くなって英語や中国語の表記が目につくように。

それより下に進んでみると、もはや判別不可能な文字化けが溢れていた。

「誰が作ったんだろ。あのヒトなのかな。雑に日本語に翻訳したような……」

日本にも対応するよう、急ごしらえで無理やり翻訳したみたいな違和感のある表記……私は、なんとなく最近プレイした海外のインディーズゲームを連想した。

クラスの男子が教えてくれたゲーム。機械的な翻訳が目立つ、荒いゲーム……

「とにかく、もう少し試してみよう……」

寝起きとは思えないくらいに目が冴えている。操作する私の指が止まらない。生唾を飲み込んで再び周囲の情報を取得してみる。

スマホを見ると、私のよく知る存在が読み込まれた。

「あ、せとつち……」

瀬戸徹（せと とおる）

私の友人だった。

近所に住む昔馴染みの男子であり、いま通っている学校でもクラスメイトと、いわゆる腐れ縁と言える存在だ。

とはいえ、いまの工業学校に入るまでは、それほど仲が良かった訳じゃない。同じ学部に入學してから、露骨に私へと絡むようになってきたのだ。

たぶん、通う学校が男子ばかりだから、私という女子を貴重に感じたのかも。幼馴染をアピールして、最近はしよつちゆう一緒に居る。毎朝と私の家に寄って一緒に学校に行く程だった。

さつきは受信してなかった、せとつちの情報……

急に現れたということは……と、その時。我が家のインターフォンが鳴った。

「茉莉ー、徹くんが来たわよー。早く起きなさい」

「もう起きてるからー。私の部屋に上げてー!!」
一階から母の大声が轟いた。

私が返事すると、階段を駆け上がる音が近付いてくる。
間もなくドアが開くと、見知った顔がそこに在った。

「よお。寝起きかよ」

「ん……」

やたら長身な幼馴染こと、せとつちだった。

私のスツピンを容赦なく知る唯一の存在。裏を返せば、せとつちにスツピンを見られようとも、なんとも思わないって意味なんだけど……向こうは違う解釈をしているかもしれぬ。

薄いTシャツに薄い半ズボン、ぼさぼさ頭な私を視て、せとつちが楽しそうに嗤う。私の頭を撫でながら……

「つたく、ホント朝がよええなあ……早くしないと遅刻すんぜ」

「ん、うがいしてくる」

ただ学校に行くだけなのに、高そうなネックレスをじゃらじゃらと首に掛けるせとつち。今日も頭をワックスでばっちり固めており、しやれた香水と混じって科学的な匂いが仄かに鼻を掠めてくる。私は、気にせず部屋を出ていった。

「おはよう。ホント朝に弱いわねえ。早くしないと遅刻するわよ」

「おはよう。せとつちと同じこと言わないでよ」

「徹くん、また変わったわねえ。学校に行くのに、あんなオシヤレしちゃって」

「いわゆる、春休みデビューってヤツ」

「んふふ、本当にソレだけなのかなあ？」

「……二年生は、私しか女子が居ないから。仲良いの見せつけたいだけ」

「ふーん。ま、良いや。お母さん仕事に行ってくるね」

「うん。行ってらっしゃい」

一階に下りると、スーツを着こなした母が玄関でヒールを履いている。

仕事に出る直前であり、適当な雑談を交わすと、さっさと家を出て行った。

妹も登校したらしい。家の中は、私とせとつちの二人だけになっていた。

いつもの流れである。

でも私は、食卓に置かれたご飯には手を着けず、スマホを取り出した。

「あ、お母さんと妹のタブが消えてる……せとつちのは、ちゃんと在るな」

私は、せとつちの項目を押した。

「これで私とせとつちがリンクした状態になった……のかな？」

次に、【印象】を選択。このタブでは、相互の関係性を洗えるらしかった。

現在の接続【1件】

進学してから、急に馴れ馴れしくなった、せとつち……

私からすれば、単なるチャラ男である。隙あらば私にハグしたり、頭を撫でてきたり。私のことを何度も「好き」って言って照れさせてきたりもしてくる。

この言い寄りが上辺だけなのか本心からなのか、数値として明らかになる訳だ。「うわ、なんかドキドキしてきた……」

こんな得体のしれないアプリを、普通に信用して良いのかという話だけ……私は、このアプリが出鱈目な産物だなんて、何故か欠片も思えなかった。

例えジョークアプリだとしても、検証するくらい罰は当たらないだろうと言いつ聞かせながら、私は自身とせとつちの関係性をアプリで確認した。

「うわ、えッ……え、うえええええッ!？」

せとつちに対する私の好感度。その逆も然り、私は互いの値を正視する。

私は、色々と驚いた。

私の、せとつちに対する好感度は81ポイント。

せとつちの、私に対する好感度は94ポイントだった。

分からないけど、上限は100ポイントだと思う。見た感じ、なんとなく限界値が弄れるような気がしないでもないけど。それより、色々とショックだ。

せとつちの、私に対する好感度が高すぎる。

あと、せとつちに対する私の好感度も思いの外に高かった。

「なな、なんだよ、これエッ!! 子供の頃は控えめで、進学デビューもダサくて、急に俗なチャラ男になってて、せとつちなんでどつちかっていうと好きじゃないタイプなのにッ!!」

何故か顔が熱くなってしまった。ヤバい、真っ赤かもしれない。

私は気付く。好感度にも様々の項目があるのだと。

「性意識」「恋愛感情」「友情」「信頼」と、好感度が細部に仕訳されている。

この数値は、これら全ての平均値のようだった。

個別に覗いてみると、これまた驚くべき結果を知ってしまう。

「私の……せとつちに対する性意識が無駄に高いの、なんで……」

アプリによると、せとつちに対する私の性意識は70ポイントらしかった。

「そりゃあ、平均値も高くなるよね……」

急に恥ずかしくなる。アプリの数値なんて出鱈目かもしれないのに……

加えて、友情、信頼の値が天井を触るレベルに高い。幼馴染効果だろうか？

それでいて恋愛感情が半分より下回っているのだから、客観的に観れば面白い分別なのは確かだった。

「恋愛感情は無い。まあ、ね。言い換えれば、スッピンだろうが寝起きだろうが気にしないし、せとつちを部屋に置くことにも抵抗が無い辺りは、仲間意識とか安心感があるってことかも。なら、アプリの分析はマジっぽいかも……」

とすれば、せとつちの数値はなんなのって話だけど。

性意識、恋愛感情が臨界点で固定している。お陰で総評が94点だ。

私のこと……好きなんだ……

「……ッ!!」

ヤバい。なんだかドキドキが止まらない。顔が熱い。

一人で良かった。いま、私ってば絶対に真っ赤になってる……

数値化って、こんなに面白いんだ……

ところで、催眠アプリはステータスの解析が本分では無い。

数値化した上で自在に操れるという、悪魔のような機能が備わっている。

そんな説明を受けた訳じゃないけれど、どう見ても数字は操作が可能だった。

「……」

例えば、せとつちの恋愛感情をパッと0ポイントにも出来る訳だ。

「……………」

想像したら胸が苦しくなった。

下げるのは止めよう。とはいえ、数値は既に極限だから上げられもしない。

「数値をロックする機能もある……………」

つまり、好感度が100ポイントの状態を永久的に維持が出来る……………とか？

どんな態度をしてみせても、せとつちが永遠に私を好きで居続けられると？

もしも、この「性意識」を限界の状態で固定し続けたら……………

あの、顔だけは良い幼馴染が……………ずっと、私に対して発情状態に……………??

「う、あッ……………!!」

ゾクゾクゾクツ!!

私の、全身の毛が逆立った。

「……………」

私は、黙って【印象】のページからスワイプして前項目へと戻る。

(操作……………)

恐らくは、このアプリの真骨頂であろう項目……………【操作】が、どうしても気に

なつて仕方が無かった。

感情なんて曖昧な概念だろう。この項目にてアプリの真贋を問うとしよう。

私は、いそいそと【操作】をタップした。

(うわ、これまた七面倒な……)

開かれた先は、細かい文字で羅列されたばかりのインターフェース……

あまりにも煩雑した細目と、センスを疑うデザインに、頭を抱えなくなる。

一呼吸して再び目をやる。目が痛くなる程の細かい文字群が列を成している。

だが、メインメニューと同様に、(恐らくは)利便性の高い項目から順に並び替えられているような気がした。

しかも、利便性と言っても、俗物にとつての利便性だ。

強いて言うなら……エッチなことしか頭に無いオトコ向け……って感じ。

(感度の操作って……やっぱり、そういうことだよね?? 感度の対応先って??)

接続された女性の感度を自在に……??

しかも、指定した人物でしか感情やら感度が反応しなくなる設定も可能らしい。

例えば、今後せとつちが私以外の女に恋心を芽生えさせないように出来るとか?

私以外の女では感じなくなる……みたいな?

「オーガズム」「ドライオーガズム」といった肉体的な反応も操作が可能っぽい。

浮気対策というか、なんとというか……異常な独占欲を実現したような機能である。

開発者の正気を疑う。根を詰めたアプリの徹底ぶりに再び恐怖した。

いや、恐怖というよりも呆れるわ、こんなん……

世の男子たちを私でしかイクことが出来ないようにしたり……

或いは、どんな手段を用いても絶頂へと至れないようにすることも出来ると？
悪魔の所業。正に、神の悪趣味だった。

「いやいや、冷静になって。そもそも、本当に出来るとは限らないんだから……
というか、まだアプリが本物なんて確証は無いんだから……数値も出鱈目でさ。
アプリが本物かどうか確かめるなら……これしかない」

好奇心旺盛な性格じゃなくても、いきなり自分のスマホに正体不明のアプリが
インストールされれば、誰だって気になるものだ。

私は、別に間違っていない……なんて、誰も聞いてない言い訳を内心で零すと、
【操作】の項目にある【強制行動】をタップする。

「間違いなくエロの為に作られてるじゃん。気持ち悪い……」
と言いつつ、中身を確認する。

強制行動を開くと、またまた無数のタブが我慢を埋め尽くしてくる。

「脱衣」「手コキ」「足コキ」「騎乗位」「後背位アナルセックス」……無数に。
これも、汎用順に並べられているとしたら、まるでオトコのヒトが使ったような
形跡だ。

「……………」

私は【強制発情レベル4】【オナニー】の二つのタブにチェックを入れていた。「これでせとつちが発情して、強制的に自慰もし始めたってこと？　いま、私の部屋で…………お、おち○ちんを出して…………」

ちよつと信じ難い。

数値の件までは、アプリの信憑性を疑わなかったけど…………

【操作】の項目から、一気に冷静な自分が現れた感じ。

やっぱり、本物な訳が無い…………そう思いながら、私は自分の部屋へと赴いた。

直後。私はアプリのチカラを思い知る。

そして始まる私の催眠アプリ人生…………これは、正に一ページ目だった。

プロローグ 後半

「せとつち……い、一回イッたのに、まだ止められないの？」

「と、止まらないんだ、ごめん。た、頼む。お願い……俺を見捨てないで……」

「ま、まあ、見捨てはしないよ」

「うっ、うああああ、茉莉の……匂い……布団ツ、枕のツ……ああああッ」

「せとつち、今度は、その……布団には出さないで……」

「わ、悪い……って、ってか、視ないで……恥ずかし……」

「いや、私の部屋だから……」

「ああああ、またイクツ、ああああッ、茉莉ツ、茉莉ツ……ああああッ」

「ドプツ、ドプツ、ドプウ……」

「あ、言ったそばから、また……」

さつきイッたばかりなのに、せとつちはまたも射精した。

私の枕を抱えながら、私の布団で匂いを貪りながら……二度目の射精を果たす。

呻き声と共に、ダンゴムシのように丸めた背中を私に向けながら、ビクビクと痙攣を繰り返している。お尻が何度も引き攣り、快感の声も止められずに……

「……………」

私は、それを呆然と視るしか出来なかった。

どうやら、アプリの本物だったらしい。ここで確信は確定へと変わる。

私が部屋に入った時には、既に自慰を始めていて……必死に弁明しながらも、手の動きが止められず、せとつちは間もなく射精した。

当然、せとつちは催眠アプリの存在を知らない。想っていた相手の部屋で急に自慰を始めて、それを当人に見つかるなんて羞恥でしかない。真っ赤な顔で泣きながら謝っていた。

それでも、「ごめん」と嘆き、ノンストップで二回目の自慰に移って……

私は、二度目が終わるまでの十分くらい、棒立ちで鑑賞することになった。決して私に顔を合わせず、哀れに自分を慰める幼馴染の背中を……

最近の、やたら気取った振舞いが嘘のように、私のよく知るせとつちみたいに、低姿勢で何度も謝っていた。見捨てないでと、素直な気持ちを吐露していた。

罪悪感が込み上げる。春休みにイキキャラデビューを果たした、いくらダサイ幼馴染でも、せとつちはせとつちだった。その姿が哀れ過ぎて直視できなかった。

三度目を始めようとしていたから、私は慌ててスマホを開いて【オナニー】のチェックを外す。ゆっくり、せとつちの丸い背中が伸びる。強制的に手を動かしながら、せとつちの挙動が静かに止まった。

自室が静寂に包み込まれる。

せとつちは、私に顔を合わせようとしない。ただ俯いて口籠っている。露骨に肩を落として、いまにも泣きそうな表情を浮かべていた。

私も私で罪悪感に駆られて動けない。申し訳ない気持ちが溢れて仕方がない。まさか本当に、アプリに支配されることが実際にあるなんて……

チェックを外すまで永久的に止まらないなんて……

「ごめん」と思いながらも、それを口には出せない。こんな、エロ同人御用達のアプリを口外するのは、やはり本能的に憚られてしまい、なにも言えなくなる。居たたまれず、隣に並ぶ形でベッドに座る。次の瞬間。強い力が私を引っ張る。せとつちが唐突に私を引き寄せてきた。

私の腰に両腕を回しては、そのまま自分に引き寄せてくる。驚く間もなく私は、そのままベッドへと押し倒された。

「きゃっ、せ、せとつち!？」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

「ちよっ、な、なににする……の……」

「あんなん視られたからには……も、もうダメだッ……無理だ……!!」
「な、なにがッ!」

「嫌われる。お前に嫌われるくらいなら、せめて一回くらいは……」

「だ、大丈夫だからッ、せとつちのこと、あれで嫌ったりしないからッ!!」

「ウソだッ、お前の部屋で俺は……あんな……うあああああッ!!」

「んんんっ、せ、せとつち……!!」

せとつちの顔が近い。追い詰められたような、酷く歪んだ表情を浮かべている。戸惑う私。両肩を押え付けられる。体格の良いせとつちから逃げられる訳も無く、動けない状態を良いことに、せとつちは無理やり私の唇を奪ってきた。

「んっ、せ、せとつち……」

「はあ、はあっ、茉莉……ああ、茉莉ッ、遂に……キスを……はあ、はあ……」

「も、もう止めて。本当に、気にしてないからッ、大丈夫だからッ」

「うるさいっ、もう止まらないんだよッ、ああ、茉莉ッ、あああああッ!!」

せとつちの暴走に、私は戸惑った。

唇を奪い、しかもチャックから零れたペニスが私の腹部を叩く。私の腹部へと擦り付けては、三度目の射精の扉を開こうとしていた。

荒い吐息を交えた乱暴な腰使い。嫌われたくない……と言いつつ、私に対して性欲を完全に剥き出しにした動物的な貪欲を見せてくる。せとつちへと罪悪感を抱いていた私は、あまり抵抗を見せなかった。

しかし、せとつちの暴挙も結局は私の所為だったと後に分かる。先程、慌てて【オナニー】は解除したものの、私は【強制発情】にもチェックしていたことを失念していたのだ。アプリの所為で情欲が臨界点に達していたのだ。

そうとは知らず、せとつちの欲望を受け入れる私。身体から力が抜けたことに、せとつちが小さく息を呑んだ。

「……最後まで良い？」

「……大丈夫」

「もう止まんねえわ。嫌われても良いから、最後までやる……」

「嫌わないって」

「茉莉……ありがと……んっ……」

「んっ、ふうっ……せとつち……」

ベッドの上で二人が重なり合う。身体が密着しての、濃厚なキスが絡んでいく。受け入れる私に、せとつちが一転して優しい動きになる。抑えていた私の肩から手が離れて重みが一気に軽くなった。

でも、キスは相変わらず激しい。優しくも、情熱的なキスだった。

重なる胸板から、せとつちの胸の鼓動が伝わってくる。アプリの通りに、私のことが好きだとしたら、そりやあ平静では居られないだろう。けど、せとつちの動悸は、心配になるくらい激しくドキドキ高鳴っていた。

(せとつち……いつから私のことが好きだったんだろう……)

「んっ、ふうっ、んっ……」

いままで私は、せとつちに対して恋愛感情も性意識も無かったのに……

なんか芽生えてきそうだ。私までドキドキ始めている。

まあ、これだけ激しくキスされて、しかもお腹におち○ちんを擦られれば、ね。なんて言い訳を交わしながら、少しずつせとつちの魅力に溺れていく私。

せとつちから送られてくる唾液を飲み込む度に、体温が上がっていく気がした。局部が熱くなるのを感じた。

「あ、あの、さ。茉莉……」

「んっ、なに……?」

「茉莉って初めて?」

「……ううん」

「そ、そうか。誰と?」

「ぜ、全員言わないとダメ？」

「……………いや」

「……………」

「……………」

「せとつちは初めて？」

「……………」

「じゃあ、その。私がリードするね」

「……………あ、ああ」

男子って存在は、やたら童貞をコンプレックスに感じたりするらしい。せとつちの顔は、までもや真っ赤になっていた。

そんな、未経験を恥じるせとつちが可愛くて……………私の局部がキュンとする。今度は一転して私が、せとつちを覆い被さる姿勢となる。

ベッドに仰向けになるせとつちに跨った。

「騎乗位…………？」

「私、この体勢が好きだから……………」

「まあ、Sっぽいからな、茉莉は……………」

「関係あるの？ なんとなく、この体勢が好きってだけなんだけどね」

「な、なあ、茉莉はクラスの奴らともヤツてたりするの？」

「いま、その話を聞きたいの？」

「……………」

「クラスメイトとは……四人かな？」

「そうか」

「一年生の時にね。一人は夏休み頃に。後の三人とは、冬に……」

「俺は五人目かあー」

「ごめん」

「いやいや、既に俺以外の全員とヤツてんじやね、って思ったりもしてたから」

「そんな訳ないでしょッ、そこまでビツチじゃないですー。ってか、向こうにも好みとかあるだろうし、普通に考えて有り得ないでしょ」

「そんなこともないんだがな……」

「ん？」

「い、いや、なんでもないッ」

「……………」

「ほ、ほら、早くリードしてくれよ。俺を卒業させてくれ」

「ん……じゃあ、いくよ」

言葉を濁す様子が少し気になるものの、続きを促されて挿入に打って出る。

上下の寝間着を脱ぐ。勿論、勝負下着ではない。白の地味な下着が露わになる。下着姿な私を、せとつちが食い入るように見ている。使い古された、ボロボロの下着を凝視されるのは少し恥ずかしいけど、せとつちの目には入っていない様子。主に、私の肌色ばかりに目を奪われていた。

もしかしたら、せとつちは女子とキスすらしたことが無かったのかもしれない。せとつちの初めてを、こんな形で次々に奪わってしまったなんて……と、アプリを軽率に使用した自分に、再び罪悪感を覚えるのだった。

「あの、い、いきなり良いの？」

「ん？ なにが？」

「その、前戯とか……」

「大丈夫。もうめちやくちや濡れてるから」

「………ツツツ!! わ、分かった」

足の付け根から下着へと指を入れる私。グイッと引っ張って局部を見せつける。そこは、せとつちにとって未知なるゾーン。

そんな局部が煌めきを放っていたのだから、せとつちの心中も穏やかではない。私も、ここまで来れば流石に興奮を抑えられなかった。

「あッ、あああああああッ!! せとつちの……大きッ……んんんんッ」
「うぐっ、ま、茉莉ッ……ああああ、挿入ってるッ、あ、熱ッ、スゴッ……」

「えへへ、せとつちの童貞、頂きました♥」
「ああああ、茉莉い……茉莉い……」

亀頭で陰唇を軽く解すと、私はせとつちを全身で受け止めていった。

物凄く硬くて大きいペニスが、すっぽりと根元まで肉壁に覆われていく。

幼馴染のせとつちが私の中に入ってきた。せとつちの童貞を頂いた。

それが嬉しくて……私は、ジワリとオーガズムに達していた。

せとつちというと、身体を限界まで仰け反らせている。童貞喪失に感動しては、目を固く瞑り、歯を食いしばっていた。

「せとつちの大きいね。挿入してるだけでも気持ち良いよ♥」

「あ、ああ、お、俺も……」

「せとつちの、中でピクピクしてる。もっと気持ち良くさせてあげるね♪」

胎内で小刻みに震える陰茎……正にこれから。という所でせとつちが呻く。

「ま、待って、う、動かないでっ。ヤバイ……で、出る、もう……ごめ……」

「えッ？ あッ……」

「うあ、ああああッ、ごめッ、ああああッ!!」

「えっ、あっ、あああっ、せとつちっ……んひやあああああんっ!!」
ドクドクドクツ、ドクツ……

ゆっくりと味わう為にも、少しずつ動いていこうかな……と思っていた矢先に、せとつちが果ててしまう。挿入して十秒と経たずに、胎内で精液の熱が走った。

想い人だった私とのセックス……羞恥、快感、感動、全てが一体となった結果、あっという間に射精欲が高潮してしまい、それを抑えることも叶わず……またもせとつちは謝りながらアクメに至る。

対する私も、じわじわと官能が競り上がっていく。

不意を突かれたように、子宮に熱い滾りが広がってくる。中出しをされたのは初めてである。私も、未知なる快感を覚えてしまい、子宮の燃えるような感覚で膣が融けるように愛液を迸らせた。

「せとつち……せとつちの熱いの……入ってくる……めっちゃ気持ちいいよ」

「うあ、あっ、あああああっ……ごめん……ごめん……」

「ん、えええ、なんで謝ってるの？」

「だって、こんな早くて……」

「気にしないでよ」

「うううっ……」

ジワリと緩やかなオーガズムが広がってくる。

この、全身がゴムみたいに緩む感覚……ずっと味わっていたい。まるで胎内に湯たんぽを入れたような感じだ。

快感を伴う湯たんぽ。股間から脳まで次第に気持ち良い熱が上がっていくのを感じる。この状態で更にめちやくちやに突かれない気分だった。

でも、これだけでも私は満足なんだけど……

せとつちは、そう思っていないみたいだ。

男にとって早漏にも自虐的らしく……開始五秒で果てた自分を悔いていた。

そんなの私は全く気にしてないのに。気まずい空気が流れている。

そういえば、催眠アプリの【操作】には、絶頂を制限する項目もあったつけ。

(いやいや……それは流石に……あ、感度を操作するのは良いかも)

せとつちが絶望に伏してるのを良いことに、私がコソコソとスマホを手取る。せとつち、せとつちとエッチしてるのに。せとつちの一世一代となる初めてのセックスで……しかも早漏でショックを受けてるのに、肝心の私の方がアプリのことばかりなのは申し訳ない……と思いつつも、止められない。

三度目の射精となると、流石のせとつちも力尽きてしまう。さっきまで胎内でパンパンに膨らんでいたイチモツが、どんどん萎びていくのを感じる。

ここで終わらせる訳には行かない。ここで終わらせたなら黒歴史になってしまう。せとつちを傷付けたくない。私は、隠れてアプリを操作した。

「とりあえず……抜くね？」

「……うん」

「まだ、出来そう？」

「……いや、ちよつと、もう……」

「そうなの？ めつちや元気そうだけど？」

「あれ？ あ、あれ……？」

萎え始めていた陰茎。だが、改めてみると、水を得たように再起している。

せとつちが驚くのも無理はないだろう。私は密かに【クールダウン】の設定を「0秒」に弄ったのだ。

だから、俗にいう賢者タイムも無く、せとつちの股間が再び漲り出している。

更に、発情状態も継続中だ。勃つていけば、せとつちの気力も充溢する。

私は、言葉に気を付けながら続きを誘った。

「私でこんなに興奮してるってことだよね？ それって凄く嬉しい……」

「そ、そうか？」

「うん。だから、落ち込まないでよ。寧ろ私は嬉しいんだから」

「そ、そっか……そっか。分かったっ」

「うん。まだ……出来る？」

「ああっ」

羞恥で泣き崩れていたせとつちに元気が戻った気がした。

私の言葉でオトコのプライドを取り戻した気がした。

こっそりとアプリを弄った甲斐がある。アプリの所為で始まったことだけでも。

これで、せとつちは何回でもイケるようになった。

もつと、せとつちを感じてみたいと思った私にも、心の悦びが拡がってくる。

身体も、陰核が痺れるように猛り、快感を求めた全身の毛穴まで開いていた。

実は、感度の調整もアプリで可能と知った私は、自身の数値を上げているのだ。

快感を抱くレベルを弄り、序でに性感帯の範囲を拡げていた。

既に効果は表れている。性に酔って興奮するせとつちから視られているだけで濡れちゃうくらいに……私の身体は変化していた。

ああ、これってダメ人間の始まりなんじゃないだろうか……？

猛烈にオナニーしたい欲に駆られる。ここで挿入れられたら、どうなることか。

「ごめんね、せとつち」

「え、なにが？」

「ううん、気にしないで。私とエッチ……私なんか相手が良いの？」

「お前だから良いんだよ」

「マジ？」

「ああ。その……マジで好きだ。お前のこと。前々から……」

「……ッ、う、あッ……ヤバい、その言葉……ッ♥」

せとつちの、蕩けるような声色が私の脳を貫く。言葉だけでイッてしまった。

ああ、私って奴は……

アプリのチカラが強すぎる。性欲を……理性を抑えられそうになかった。

「じゃ、二回戦目……やるつか……」

「ああ、茉莉ッ……マジで幸せ過ぎるッ、茉莉いッ……」

学校をサボり、それからも幾度と行為を重ねていく私たち。

アプリにより快感が肥大しており、私は時を忘れてせとつちに跨るのだった。